

## 【プロローグ】

これは絶え間なく蝉の鳴き声が聞こえるそんな夏の日の話。

炎天下の中を頑張って歩く一人の少年とも少女とも取れる人物。それを嘲笑うかのように強さを増す太陽光。頬に大粒の汗が一筋通り、汗が顎から零れ落ちたのと同時にその人物は崩れ落ちた。

プロローグend

## 第一章『告白』

「うん……ここどこ……？」

「あ、目が覚めたのね。ここは医務室よ」

その声の主は、おっとりとした雰囲気を持った医務服を着た女性だった。

「また、志乃ちゃん倒れたのよ」

それを聞いた人物——志乃は申し訳なさそうな顔をしている。

「先生、ごめんなさい。毎回毎回お手を煩わせて……でもちゃんはずけないでください。僕も一応男なんです！！」

「あらあら。まあそれは置いておいて……私に謝る前にあの子にお礼を言ったら？」

そう言って視線を志乃から外し〈あの子〉の方に視線を送る。

「もしかして……仁が僕の事を運んでくれたんですか??」

「そうよ……それに目が覚めるまで側にいたのに気がついてなかったのね」

先生の言葉を聞いた志乃はションボリした。

「まあそうションボリするな志乃。俺はただ好きでいただけなんだから気にしたらダメだ」

「うん……とにかく助けてくれてありがとう!!」

志乃は満面の笑みを浮かべ仁に向かい礼を言った。仁はなぜか目を背け、足早にどとかに行ってしまった。

「そろそろ授業始まるわよ？志乃ちゃ……くん授業出れそう？」

「今ちゃんて言いそうでしたよね……………大丈夫です！じゃあ失礼します」

若干よろめきながらも志乃は教室に向かっていった。

キーンコーンカーンコーン

空が夕日に染まった頃志乃と仁は一緒に帰っていた。

「僕の家今日親居なくて寂しいんだ」

「それなら、俺が泊まろう」

夕日のせいか顔が赤い志乃はどこか恋する乙女のようにみえた……

続きは本編で！！